正午

襟元を暖める陽光(ひかり)は

うずくまる感情(こころ)を遠い想いへと誘い

テーブルの上に鮮やかに落ちた影の中で
ひっそりと遊び戯れているのは
あれは飽くことを知らぬ者たちだ

それを見つめる僕は
ただ無為に朽ち果てることを希っている
ああ、これ以上の何が要ろう
これ以上の何を生きよう
感じることが僕の生であるなら

影は少しだけ動いていた
僕は思わず時計を見上げていた
明日、未来、ああ時間だ
僕を追い立てるものは何だ
生活か、それとも時間か

音楽は、詩は、そして陽光は
それら僕に迫る追手からの逃走を
ほんのちょっと手助けしてくれる———
それだけのものなら
ああ、そんなものは無意味だ

影はもうあんなにも動いている
そしてその中にはもう何もいない
部屋中ひっくり返して捜し回っても

何かをしなければ
何かを産み出さなければ
皆、生きている・・・

生きている———
僕の生
感じること

朽ち果てること・・・

(1997.1.13)